

〔研究ノート〕

組織論で読み解く

江戸時代(8)

遠田雄志 / 小川 格*

- 目次
- はじめに
- I. 組織としての江戸時代
1. 組織の常識
- 1.1 鎖国
- 1.2 米本位制
- 1.3 参勤交代
- 1.4 世襲と身分制度 (以上第46巻4号)
2. 成長ゆえの衰退
- 2.1 武士が武器を独占した社会
- 2.2 家康を支えた譜代家臣団
- 2.3 徳川幕府の金, 物, 人
- 2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折 (以上第47巻1号)
3. 変化の気づきと互解
- 3.1 海外事情
- 3.2 田沼意次
- 3.3 蘭学者たち (以上第47巻2号)
4. 常識の更新
組織の適応モデル
- 4.1 尊皇攘夷
- 4.2 志士という名のアジテーター
- 4.3 適塾と蘭学の行方
- 4.4 幕末そして維新のあけぼの (以上第47巻3号)
- II. 江戸時代の春夏秋冬
組織の適応過程
1. 春
- 1.1 最後の戦争
- 1.2 改易と浪人の激増 (以上第47巻4号)
- 1.3 将軍と天皇
- 1.4 鎖国への道のり (以上第48巻1号)
2. 夏
- 2.1 元禄時代
- 2.2 5代将軍綱吉と生類憐れみの令
- 2.3 赤穂浪士の忠義
- 2.4 芭蕉を生んだ元禄時代 (以上第48巻2号)
3. 秋
- 3.1 吉宗と常識
- 3.2 吉宗と田沼の政治手法
- 3.3 定信の目指したもの
- 3.4 本居宣長と国学の発展 (以上本号)
4. 冬
- III. 江戸時代の意味するもの
おわりに
3. 秋
- 組織の盛衰サイクルの第3の局面の秋は、本誌第47巻第4号 図5.1より明らかなように、保守局面の前期である。
- そもそも、保守局面とは、組織の衰退していく時期に対応している。しかし、衰退の程度が未だ軽微な前期とそれが深刻となる後期とでは組織の様相が大きく異なる。本稿では、保守局面の前期が考察されている。
- 組織が成長を遂げピークを過ぎた後、すでに確立されている秩序を維持、擁護しながら組織の衰退をくい止めようとするのが保守局面である。この時期、組織が今かかわっている環境はすでに常識に合うものでなくなっていて、常識どおりに行動をしても、想定外の結果がしばしば生ずるようになる。そのため、互解の形成が

*編集事務所南風舎顧問

盛んになり、常識が疑われるようになるハズである。

ところが事はそう単純には運ばない。特にこの秋の段階での常識はといえば、組織の成長を最前までもたらしめていたので、その権威も確立されていて高い。したがって、この時の常識の差戻力も拒絶力もきわめて大きくなっていて、互解はなかなか生まれえないし、常識の信頼性もあまり下がらない。そのため、多くの人はいままでのように常識に従い現状を維持しようとする。しかし、日頃から環境に直接接している例えば営業マンとか組織の運命に大きな責任を自覚している社長といった少数の人たちは、環境の現状に敏感で、このままでは危ないと思うようになる。そして、環境がなおも変わっていくにつれて、こうした少数の人たちを中心に互解が徐々に形成され広がっていく。これが保守局面前期の組織の様相である。

こうした組織の第3の局面すなわち秋においては、組織は大別して2つの対応をする。一つは、変わりゆく環境にその都度、常識を修正、微調整して衰退をくい止めようとする。いわゆる修正主義路線である。そのため、互解を含む様々なアイディアが広く求められ、人々の交流が盛んになり、組織には開放的気分が流れる。

もう一つは、組織の衰退の原因を、現在の常識そのものではなく、常識に忠実でなくなった組織に求める。組織には清廉潔白な原理主義者のヒステリックな「原点に戻れ」の声が満ち溢れ、常識に少しでも違背する人や考えは厳しく罰せられる。そして組織はきわめて窮屈で暗い空気に包まれてしまう。

しかし、衰退から脱するには、常識の一新すなわち質的転換が必要である。したがって、いずれの対応も衰退傾向にブレーキをかけることができず、程なくもう一つの対応にとってかわる。

こうして、組織は2つの対応の間を“行きつ戻りつ”しながら、衰退の度を深めていき、やがて次なる動乱の冬を迎えるのである。

それでは、江戸時代の秋において、環境がどのようになりどんな想定外の事柄が生じたのか。そうした中で、どんな人がどんな互解を生み、

広めたのか。そして衰退する時代にあってどんな人がどんな施策をもって対応したのだろうか。

3.1 吉宗と常識

徳川幕府も開府以来、100年を過ぎると、当初は考え抜かれ、完璧と思われていた体制にもあちこちにひずみが出てきた。想定されている枠組には納まりきらない現象がつぎつぎにあらわれ、当初の枠組はあちこちで破綻を見せ始めた。

8代将軍吉宗が就任するころ(1716享保元年)には、それまで潜在的に進行していた各種の破綻が一斉に露出してきた。

その典型の一つが旗本たちに払う給料が足りず遅配という事態にまで追い込まれていたことである。家康によって蓄えられていた莫大な財産は、この頃までに消費されつくしており、主たる歳入である年貢収入も年々減少し、幕府の財政は破綻の危機に瀕していた。

このため、吉宗は就任早々に財政再建に立ち向かわなければならなかったのである。

それまでの将軍や幕閣たちは、家康の敷いた路線に乗ってひたすら幕府権力の強化拡充に努めていればよかったのであるが、吉宗の直面した課題はより複雑で困難なものであった。

江戸時代はすでに組織としてのピークに達し、いよいよ下降曲面に入ったのである。江戸時代260年の全体を眺めてみると、元禄時代までは上昇気流にのって一目散に建設、繁栄に向かってつき進んできたのだが、元禄時代をピークとして、このあたりから以降は俗にいわれている三大「改革」“享保の改革”、“寛政の改革”、“天保の改革”とややヒステリックな改革政治が繰返される。

これらの「改革」の時代に挟まれた二つのやや開放的な時代、つまり、田沼時代と文化文政時代は文化的には繁栄したものの、爛熟期特有のやや退廃的な色彩をおび、元禄時代の健康な大らかさに欠けていることは否めない。

つまり、吉宗の時代、江戸時代は繁栄から停滞、さらには下降局面という大きな転機に立たされていたのである。

この時代を理解する前に、われわれが当初かかげた江戸時代の4つの常識のこの時期における実態を簡単に検討しておこう。

四つの常識とは、

1. 鎖国
2. 参勤交代
3. 米本位制
4. 世襲と身分制度

であり、組織論的に江戸時代が固有の組織としての体制を維持するために共有した常識である。

大局的にみれば、江戸時代260年間を通してこれらの常識は維持された。これらの常識が否定されたとき、徳川幕府は崩壊し、江戸時代は終焉を迎えたのである。しかし、常識は維持されたとはいえ、無傷で幕末まで保たれたわけではない。最後にはかなりつぎはぎでむりを重ねていた。そのほころびは、すでに吉宗の時代に始まっていたのである。

では、その具体的な様子を検討してみよう。

鎖国体制への挑戦

まず、鎖国の常識から検討してみよう。

1630年頃、鎖国体制が完成して以来、厳格な情報管理のもとで、幕府はひたすらその体制を維持強化することにきゅうきゅうとしてきた。綱吉の時代、オランダ商館長の江戸参府に随行した様子を、ケンペルが報告しているが、長崎から江戸まで苦難に満ちた行進ののち、江戸についてオランダ商館長は綱吉に挨拶に臨むのだが、その際、綱吉の前に膝行して挨拶をしたり、踊らされたりするなど屈辱的な扱いを受けていた。こんな扱いを受けてもオランダにとって鎖国体制下の独占的な貿易は大きな利益があり、幕府にとっても同様であった。双方にとってその鎖国体制を維持することがお互いに利益になると思われていたので、そこに変更を加える意志はなかった。

しかし、吉宗の時代になると、その様相はかなり変化が見られた。医学、天文学など西洋の科学技術が長足の進歩をとげている情報がいやおうなく流れ込んでおり、科学技術の差が痛感されるようになってきた。吉宗はこうした学問

の導入に意欲を燃やした。

吉宗は先例にとらわれず、キリスト教以外の漢訳洋書の輸入を解禁した(1720年)。さらにのちに甘藷(かんしょ)先生と呼ばれるようになる青木昆陽らに命じて、オランダ語を学ばせた。これらが日本の蘭学発達のきっかけを作った。

吉宗はオランダ商館長の江戸参府の折りに、宿舎に人を派遣して質問し、輸入の交渉をさせた。質問は天文、地理、医学、船舶、時計などに及び、輸入品も書籍に限らず、望遠鏡、時計、武具、さらに、馬をはじめ、火喰鳥、麝香猫(じゃこうねこ)、孔雀、七面鳥などの珍奇な動物にまで及び、実に旺盛な好奇心が覗える物である。象が来た時は長崎から江戸までつれてこさせ、江戸市民にひろく見物させている。当然、庶民の外国への好奇心をかき立てたにちがいない。こうした一連の行為は鎖国体制という日本の基本的なあり方に風穴を明けるという大きな政策転換の舵を切ったことにほかならない。鎖国の常識は、このあたりから徐々にゆるみはじめた。このあと、青木昆陽に学んだ蘭学者たちの努力により西欧医学をはじめとする学問・知識の輸入が急速に進み、それをテコにして西欧文明への興味と関心が膨らんでゆき、幕府崩壊への精神的準備ができてゆくことになる。

参勤交代の変更と挫折

全国の大名が一年おきに江戸へ出府する参勤交代は、妻子を江戸に留め置く人質制とセットになったものだが、大名の将軍に対する忠誠を表現する重要なパフォーマンスでもあった。出府のための大名行列の供の人数は藩の石高によって決められていた。その行列の人数、装束は藩の威信をかけたデモンストレーションであったから、行列はどうしても実力以上に華美になる傾向があった。しかし、行列のための出費や武士達の江戸滞在費は特に遠国の藩にとっては藩財政にとって大きな負担となっていた。参勤交代による多額の出費が藩の経済を圧迫することは、当初から外様の藩の弱体化という幕府の目論みの一つであったから、それを弱めるつもりはなかった。

この傾向に意外な角度からブレーキをかけたのが吉宗であった。1722(享保7)年諸大名を集め、「恥辱をかえりみず」石高1万石につき百石の割合で、幕府に米を上納する上げ米を命じた。その代償として参勤交代による江戸居住を半年分減じる。つまり江戸半年、国元1年半という緩和処置を命じたのである。

この処置により幕府の財政は一息つき、諸藩にもおおむね好評であった。参勤交代がいかに諸藩に重い負担を強いていたかがあらためてわかる。それならそのままこの政策を続行するか、さらに踏み込んで参勤交代を大幅に緩和すれば、幕府も藩も大いに助かった筈である。

しかし、幕府は8年後の1730年には、この政策を中止し、参勤交代の江戸滞在を1年とするもとの制度にもどってしまった。

もし、この政策を続行していたら、幕府も全国の諸藩も財政は楽になり、幕藩体制の延命効果も大きかったと思われるのだが、参勤交代という常識に変更を加えることはどうしてもできなかった。参勤交代の変更は幕藩体制の根幹を揺るがすという反対が大きかったからである。どんなに合理的と思われても、常識を変更することはたやすいことではないのである。参勤交代はこのあと、幕末まで変更されることはなかった。

吉宗は、徳川15代将軍のうち、家康を除けば、もっとも将軍としての権力を行使した強い将軍であった。その吉宗の力をもってしても参勤交代の変更は一時的なものに終わったのである。

米本位制の苦悩

吉宗が30年にわたる在任期間中、終始もっとも心を砕いたのが米価問題であった。

就任早々に財政難に直面した吉宗は、まず最大の収入源である年貢を増やすため、新田の開発を奨励した。このため、日本橋などに高札を立て、商人たちの資本参加をうながした。このとき、開発された新田には、埼玉県の見沼新田のほか、三鷹、小金井、国分寺などの武蔵野新田がある。この一連の新田開発は大規模なもので、大きな成果をあげた。年貢取り立ての強化などの政策と合わせて年貢は着実に増えたので

ある。

しかし、困ったことに、こんどは米価の下落が始まった。せつかく増えた年貢収入も値段が下がったのでは、元も子もない。米で収入を得る武士にとっては、米価の下落は直接収入の減少となるからたまらない。もちろん米を生産している農村にも大きな打撃を与えた。しかも、米以外の諸物価は上昇を続けていた。

そこで吉宗は、米価の上昇のためにいろいろ手をつくした。たとえば、従来米価高騰の原因になるとして禁止していた米の先物取引ともいふべき帳合取引を公認したり、米商人に米の買い占めを指示したりしたが、なかなか成果があらなかった。

そうこうしているうちに、大規模なイナゴの発生がはじまり、四国、中国地方を中心に大きな被害を与えた(1732年)。このイナゴの害により、全国で10万人の農民が餓死したと言われている。なかには、一村ほとんどが死に絶えた所さえあった。このイナゴの害のために、全国的に米が不足し、米価が急騰し、こんどは都市の庶民が米を買えず飢えて米屋を襲う事件が発生した。ところが、その翌年には大豊作になり、再び米価は下落した。

吉宗は将軍在位中、このように米価に悩まされ、対策に奔走し、このため米将軍と呼ばれたほどであった。しかし、根本的な対策はついに見つからなかった。

米は、天候など自然の要因により、豊作、不作があるうえに、商人の投機の対象になってその価格は激しく上下する。もっとも安定していると思われていた米を中心とする経済体制がきわめて不安定なものになってしまったのである。

この時代、すでに米価は貨幣経済の中に組み込まれ、投機的な商品取引の対象とされていたため、将軍がコントロールできる状況ではなかったのである。

世襲と身分制度の罣

つぎに世襲と身分制度について検討してみよう。

将軍の地位が徳川家の世襲によってきまる、

しかも長子相続を基本とすることは徳川幕府の常識だった。才能や資質を問わず、もっぱら長男またはもっとも家康に血のつながりの近いものという原則は、後継者争いの弊害はなかったものの、しばしば困った事態を引き起こしてくれた。

吉宗の長男家重は酒色におぼれ、懦弱な性格の弱い人間であった。その肖像画を見ても顔面がゆがんで苦しそうである。反対に二男宗武は父に似て文武に優れ記憶力も抜群であったといわれている。このため宗武を次期将軍に期待する声が強かった。しかし、吉宗は迷うことなく長男家重に家督を譲った。これほどいろいろ常識に変更を試みてきた吉宗でも、後継者については、常識に手をつけようとはしなかったのである。それは吉宗の30年にわたる治世のなかでももっとも理解しがたいことであった。

家重は35歳で第9代将軍になるが、病弱で言語に障害があり、その言葉は側用人の大岡忠光にしか理解できないほどであった。

このあと歴代将軍の劣化はとどまるどころを知らず、政治の前面に将軍が立ったことはなかった。唯一の例外が15代将軍慶喜であったが、皮肉なことにその最大の政治的決断は、徳川幕府の幕を引く大政奉還であった。

このように、4つの常識のうち、鎖国は修正を加えられ、参勤交代は修正を加えられたものの元通りに引き戻され、米は時代の荒波に翻弄され、世襲は常識を頑なに守ったため、将軍の力の弱体化を招いた。

こうして検討してみると、興味深い事実が明らかになる。4つの常識のうち吉宗がいとも無造作に変更したものは、鎖国と参勤交代であった。反対にこれこそ変更すべきと思われた長子相続は指一本ふれないというほど常識に従っており、米に到っては米価の安定こそ幕府存在の基礎という強い思い込みで在任期間中、七転八倒の苦しみを味わいながら死守した。このような常識に対する態度の違いは何を示しているのだろうか。実は米本位と長子相続は家康自身が決めた原則であったのに対して、鎖国と参勤交代は家康の時代にはまだなかった。これが常識として定着したのは2代秀忠及び3代家光の時

代だったのである。

吉宗は、家康の決めた米本位制と長子相続の常識には指一本触れず、秀忠・家光が決定した鎖国と参勤交代の常識には無造作に変更を加えたということになる。ここに吉宗の家康に対する絶対的な尊崇の念が、鮮やかに見てとれるのである。

ここで、さらに注目したいのが、米である。米をめぐる状況にもっとも根本的な変質を迫ったのが商業活動であり、それを支配したのが商人たちであった。

徳川幕府は当初士農工商として、商人を社会の最下層に位置づけていた。しかし、商品流通が盛んになるとともに、その商人が次第に力をつけ、社会全体を動かしはじめたのであった。武士は商人に依存して米を現金化し、さらに借金をかさねなければ、生活が成り立たなくなっていた。

幕府は強権をもって豪商をとりつぶして、借金を帳消しにしたりしたが、幕府も諸藩も商人からの借金なしには、動かないという深刻な事態になってきた。

幕府が当初、まったく想像もできなかった、貨幣経済の巨大化と商人による支配という事態が次第に姿を現し、武士が商人に支配されるという状況が全国的にあらわれてきたのである。

これは、第4の常識の身分制度ひいては徳川幕藩体制をゆさぶる大問題となった。

3.2 吉宗と田沼の政治手法

江戸時代も後半に入り、内外の環境が当初の枠組を超えて変質しはじめたとき、旧慣墨守の従来政治手法が役に立たないことが次第に明らかになってきた。こうした状況に危機感をおぼえた譜代の家臣団は、次の将軍の力量に大きな期待を寄せた。こうした譜代の家臣たちの興望を担って将軍の座についたのが紀州藩の第5代藩主として、めざましい実績をあげていた徳川吉宗であった。吉宗は儉約の励行、新田の開発などの施策により、12年間で疲弊していた紀州藩の財政再建をなしとげるなど顕著な実績をあげていた。また吉宗は家康の曾孫にあたり、血統の上でも将軍として申し分がなかった。

吉宗のめざしたもの

吉宗は将軍となる（1716年）と、ただちに幕臣を集めて宣言した。

「権現様（家康）の御代から格式として定まっていることはたとえ無用の事と思えても省略しない。そのほかの事は出来る限り簡略にし、冗費を省いてゆくこと」。

こうした就任当初からの方針は、前項で検討したように家康の定めた常識には手をつけなかったという態度に見事に一貫したものであることがわかる。

その吉宗が将軍として目指したのはもちろん家康の治世だった。

家康の世の社会の仕組みとは、百姓が米をつくり、その収穫の7割を年貢としてとりあげ、それで武士の腹を満たす。米以外の生活必需品は商人が運んでくれれば、それで世の中は十分である。商品流通は幕府が認めた特権商人に任せる。武士は世の中が乱れないように統治し、つまり幕府が危険な外様大名をしっかり押さえおけば、百姓は農業に専念でき、この体制は安定して、100年でも200年でも心配ない、というきわめてシンプルなものであった。

吉宗は100年前のこんな社会を理想として目指して走りだしたのである。吉宗の目には、市民が贅沢になってふしだらな生活を送るようになったため、経済が苦しくなり、世の中が悪くなったと見えた。そのため、激しく変化する社会に対して必死になって流れを押しとどめようとした。吉宗にあっては、家康の時代こそ理想の時代であった。

このため、吉宗自身も贅沢をやめ、市民に対しても質素儉約を強くもとめた。自分自身、冬でも一重の木綿の着物で通し、当時の食事は日に3食が常識になってきたのに、2食の習慣を変えようとせず、一汁三菜とし、城中で諸老中に出す料理は一汁一菜に決めた。またそれまで三献であった酒を一献に変更した。家臣から市民まで特に服飾の華美には目を光らせて監視した。

その反面、吉宗自身は、家康がそうであったように鷹狩りなどが大好きで、たとえば享保11（1726）年3月下総国小金原で大巻狩を行ったが、

その時には武蔵、常陸、上総、下総の百姓16万人を勢子として動員して自分自身はビロードの羽織に毛沓を履いて馬に跨り、2,772人の家臣を従えていた。驚くべき大げさな遊びだが、吉宗自身は決して贅沢をしているつもりではなく、家康の時代こそ最高と信じて、戦争のない世に、関ヶ原の合戦のような戦陣をイメージして大真面目でやっていたのであろう。

吉宗の家康崇拜は他のどの将軍にも劣らぬ強いものであったから、財政再建が軌道に乗ると、享保13年には、65年間とだえていた日光社参を断行した。綱吉も家宣も計画したものの、財政難のため実行できなかったものである。日光社参はかつての上洛と同様、譜代大名をはじめ諸藩を動員した大規模な軍事パレードであるから、経費も膨大なものであった。なにしろ行列の先頭が岩槻に着いた頃、最後尾はまだ江戸城にあったというから、大変なものであった。動員された大名、旗本は13万人、人足22万人、徴発された馬32万頭に達した。また、行列は利根川を渡らなければならないが、これだけの行列を渡すには渡し船というわけにはいかない。そこで、380メートルの川幅いっぱいには50艘の船を浮かべ、その上に板を並べた船橋をつくった。この橋を造るために近郷の百姓が動員されたが、この工事に4ヶ月を要した。

これも巨費を投じた行事であったが、吉宗にとっては決して無駄使いではなく、家康に対する尊崇の念を形に表し、同時に家康の權威を借りて幕府の力を誇示する重要な行為だったのである。

だが、吉宗はただ単に後ろを向いていたわけではない。新田の開発を行い、物流の実態をつかもうと調査し、甘藷の栽培を奨励した。しかし、なによりも重要な政策は洋書の輸入解禁、さらにはオランダ語の学習を奨励し、様々な文物を取り寄せたことである。それは、吉宗の興味がきわめて実用的だったことを示している。儒学や和学に対して何の興味も示さずもっぱら役に立つ実用的な科学や技術に興味に向いていたのである。

吉宗は江戸時代を通じてもっとも強力に指導力を発揮した将軍であった。その政策は多岐に

わたっていたが、国民生活のすみずみにまで干渉するおせっかいな將軍でもあった。贅沢の禁止、芝居など小うるさく締めつけた。このため江戸の庶民は始終お上の顔色を見てびくびくして暮らしていた。

しかし、ちょうど母親の母体の中で、母親の意志とは無関係に胎児が成長を続けるように、江戸時代の枠組のなかで、將軍の期待をあざ笑うかのように、市場には多種多様な商品があふれ、商人の活躍の場が拡大し続けていった。

ところが、吉宗の質素儉約令はあたかも母体の膨らみを隠すために、帯でおなかをきつく締めあげるような行為だったのである。

こんな時代が30年も続くと江戸っ子はあきあきしてくる。吉宗が引退し、家重、家治と何もしない將軍が続くと、じわじわと自由な気分が広がり、庶民は享樂を求めて、羽を伸ばしはじめた。

吉宗から田沼へ

10代將軍家治の時代は、政治の実権を田沼意次が握った時代である。將軍を床の間に置いたまま、側用人と老中を兼ねた強大な権力を握った田沼が次第に政治を自由にしていった。しかし、田沼は市民生活に干渉したり制約を加えることに興味をもたなかった。商品経済が拡大し、物資が豊かになると、市民の生活が向上し、豊かさを実感できる社会に変化していった。

田沼は、このような社会の変質を受け入れ、新たに台頭してきた勢力、つまり新興商人や各種の企業家と手を結んでいこうとした。到る所で新しいアイデアが湧き出し、新しい事業がはじまった。事業を許可するかわりに運上金をとった。彼らの力こそ世の中を改革してゆく力だという確信が田沼にはあった。たとえば、この時代に蘭学は大きく開花した。杉田玄白らが「解体新書」を訳し、出版した(1774年)。田沼はこうした活動にブレーキをかけるようなことをしなかった。反対に彼らと手を組み、彼らのエネルギーを利用した。北海道開拓、印旛沼干拓などは、その最大の試みであった。

また、吉宗は目安箱を街に置いて民意をくみ上げたと言われている。しかし、吉宗政治の基

本的な姿勢は上から下へ命令を下すスタイルであり、その欠陥を補うために目安箱を置いたにすぎない。それに対して田沼は、基本的な姿勢が民意のくみ上げであった。その様子をよく物語っているのが、松浦静山の残した『甲子夜話(かっしやわ)』に書かれた逸話である。そこには、田沼の座敷には、請願のため、大きな部屋に二重三重に列をなして座って、順番を待つ人々の姿が描かれており、静山はこのようにして田沼がワイロをとって人事などをほしきままにしたと非難している。

歴史家の大石慎三郎は『田沼意次の時代』(1991)を書いて田沼意次の再評価に大きな一石を投じたとされているが、そのなかで、大石は静山の『甲子夜話』は信憑性がないとして切り捨てた。そのためもあってか、近年は静山の話はあまり注目されなくなってしまった。しかし静山の描く田沼像は誇張があるかもしれないが、田沼のある一面の真実をよく捉えており、決して捨て去るべきではない。

このエピソードが伝えている真実とは、田沼が人々の話によく耳を傾けた政治家だったということである。話をよく聞いてくれるから、人々は願い事や提言をもって田沼邸を訪れたのである。新事業を興すため、規制を外して欲しいとか、開拓するから許可が欲しい、有望な鉱山があるから許可して欲しいなどその内容は多種多様なものだったにちがいない。

この当時、世に山師が横行したといわれているが、いろんなアイデアを持ち回って事業を興すものが多かった。そして幕府がそれをあまり規制しないばかりか、彼らと手を組んで各種の事業を進めた。それが田沼の政治だったのである。

この時代の社会の様子をみごとに過不足なく描いたのは辻善之助の『田沼時代』(1915)である。

辻は、これを「新機運の潮流」として描いている。その新機運とは「第1は、民意の伸張である。換言すれば民権発達とも言うべきものである。……落首の多きこと、これは特にこの時代頃から著しいのであるが、そののんきで、楽天的で、人を馬鹿にしたさまは、官憲も何も眼

中にあったものではない。最も自由に時勢を諷し、政治を嘲り、不平の気を吐き文明を批評する、これもまた民権発達の一つのきざしと見ることができる。」とまず、言論の自由な展開により民権がのびのびと広がったことを説いている。(辻善之助『田沼時代』p.256)

「第2に因襲主義の破壊 封建制度に付き物の因襲主義は、この時代に破られたものが少なくない。これは幕府そのものにとってはよほど重大な損失を与えたものであるかも知れぬ。しかしながら全体の時代にとって新しい機運を起こしたという事は争うべからざる事実である。」と革新的な機運が横溢していた様子を描いている。その例として「銀座の者に帯刀を許した」「殿中において御用達町人に熨火目着用を許した」「町医者に御目見を許した」などは田沼の罪状として列記されたものだが、それはことごとく旧例を打破した実例になっており、田沼の自由な発想をよく示していると論じている。(辻善之助『田沼時代』p.261)

「第3、思想の自由と学問芸術の発達」としてこの時代各方面に盛んにその道の達者が輩出したと記している。(辻善之助『田沼時代』p.264) その例として、漢学の隆盛、藩学校の興隆、国学の展開(賀茂真淵、本居宣長)、俳諧(与謝蕪村)、狂歌(大田蜀山人)、小説(上田秋声)、絵画(円山応挙・伊藤若冲)浮世絵(鈴木春信・北川歌麿)、長唄、常磐津などである。さらに异彩をはなつたのが平賀源内、そして蘭学の隆盛などをあげている。

こうした町民文化の絢爛たる開花、これこそ田沼の時代の大きな成果である。元禄文化がまだ関西に重心があったのに対して、田沼の時代こそ、江戸時代の独自の文化が江戸を中心に開花した時代なのである。

田沼と常識

では、田沼の時代、江戸時代の常識の実態はいかなるものであったかを概観してみよう。

まず、もっとも注目したいのが鎖国の常識である。

吉宗の時代に端を発した蘭学が、杉田玄白、前野良沢らによる「ターヘルアナトミア」の翻

訳「解体新書」の出版にまでたどり着いたのがこの時代であった。彼らがおそろおそろ老中に献本した『解体新書』はなんのおとがめもなく、正式の出版に漕ぎ着けた(1774年)。これをきっかけにして、蘭学は目覚ましい躍進をとげた。オランダ商館長チングの報告によれば、当時、外人を自由に国内に入れても国に損害を与えることはなく、優秀な科学技術を学ぶ機会が得られるとして田沼は開国思想を抱いていたという。田沼は鎖国の常識を先の吉宗よりもさらに大きく修正したのである。

参勤交代については、田沼が特段の変更を試みたとは見られない。

米本位制については、すでに商業資本の支配下にあり、彼をもってしても成り行きにまかせるしかなかった。しかし、吉宗が始めた印旛沼の干拓はさらに豪商の資本を導入して大規模に推し進めた。

身分制度については、田沼自身が卑賤の出であり、家柄に囚われずに人材を登用したり、有力な町人に帯刀を許すなど身分にとらわれない自由な態度をとっていたため、家柄にこだわる譜代門閥層の不満は次第に膨らんでいった。いや、それ以上に彼らの目には田沼の急進的な諸施策が徳川幕藩体制を危うくするものと映り、危機感を通りこして恐怖すらおぼえたかもしれない。

政権中枢から排除された譜代の総力をあげた反撃が、松平定信を盟主とするクーデタへとつながった。ぎりぎりまで引き絞った弓から矢が放たれたわけだ。常識への回帰という現象がここに顕著に見られる。

田沼意次にとって、政治は現実であった。建前は眼中になかった。つまり彼は常識にとらわれることはなかったが、結果としてその常識に足をとられたのである。

3.3 定信の目指したもの

8代将軍吉宗の引退とともに、江戸時代の徳川幕府の支配体制は大きな曲がり角にさしかかった。

吉宗までは、まがりなりにも将軍がイニシアチブをとって政治の舵取りを行ってきた。しか

し、吉宗後になると全ての将軍は幕の後ろに後退し、官僚組織が政治を運営する状況になってきた。江戸時代の後半の幕府政治を仕切ったのは官僚組織とその上に乗った老中が将軍の信任をえて将軍の代行を行ったものである。田沼意次、松平定信、水野忠邦などはそれぞれ権力を握って特色ある政治を行ったとはいえ、官僚支配の政治の底流はあまり大きな変化はなかった。基本的には商業資本の拡大強化、農村の貧富の差の拡大による生産力の衰退、そして諸藩の窮乏化などの社会構造の変化がたえまなく進行した。

したがって、為政者の状況認識は似たり寄ったりであったが、その対処の方法は大きく異なっており、そこに時代の状況変化を写すいろいろな側面が見られる。

時代の大局的な動向は、民権の拡大、幕府の権威・権力の弱体化というコースをたどっていたから、この状況に沿って民間経済の拡大を促し、経済を立て直そうとしたのが田沼意次であった。反対にこの状況に危機感をつのらせ、必死になって幕府権力の立て直し、強化に努めたのが松平定信、水野忠邦であった。

松平定信の権威主義

松平定信は、本来なら将軍になるはずの人物であった。しかし、その可能性をあらかじめ田沼意次によって摘み取られてしまったと言われている。吉宗の孫として御三卿の一つ田安家の次男に生まれ、若くしてその英明が注目されていたにもかかわらず、東北の11万石白河藩に養子に出された。しかし、涙ぐましい努力の末、幕府中枢に登り詰め、田沼を追い落とすと、老中首座、さらに将軍補佐の地位を手中にし、将軍に代わって幕政を仕切った。こうした権力奪取、そして政権運営の過程で定信は常に御三家、譜代勢力の力を十分に利用した。

こうして定信は将軍にこそなれなかったものの、将軍に準ずるポジションを獲得したのである。しかし、そこには天地の差があった。将軍はいかに無能とは言え終身その地位に留まることができたのに対し、老中は将軍の信任が続く限りというあやうい条件の下でしか力を保てな

いのである。それは、田沼意次も水野忠邦も同じであった。事実定信は将軍の不興を買い6年しかその地位を保つことができなかった。しかし、この6年間に定信が下した決断は広範囲にわたっており、政策は鮮明であった。

定信の政策は祖父吉宗を手本にしたとはよく言われることである。確かに財政再建のための農業生産力の建て直しなどよく似た方向性はない。しかし、その姿勢には大きな違いがある。吉宗は、財政の立て直しのためにはなりふりかまわず奮闘した。たとえば、藩主たちを一堂に集めて「上げ米」を命ずる際には、「恥辱を顧みず」頭を下げた。吉宗は実をとるためには何でも実行したのである。目安箱の提案を受け入れて養生所を作ったのもそのひとつだ。

ところが、定信は常に幕府の権威を維持するための体裁（ていさい）にこだわった。とくにこのころ武士が町人に頭を下げて金を借りる風潮が何よりも許せなかった。中でも借金のため札差しの店に出入りする旗本や御家人に対する彼らの尊大な態度は武士をないがしろにするもので、とうてい我慢できるものではなかった。こうして、ついに禁断の一手「棄捐令（きえんれい）」を発して、武士の札差しに対する巨額の借金を一気に踏み倒してしまった。これにより踏み倒された札差しは88人で総額118万両という巨額にのぼった。こうした事態を招いた原因には踏み込まずに、いきなり踏み倒してしまったのだから、かえって混乱を招いたが、定信にとっては、武士が社会の最上位に君臨する階級秩序を守ることが何よりも大切なものであった。

実は、吉宗にもよく似た局面があった。財政難に苦しんでいた吉宗が儒者の室鳩巢に相談をもちかけると、京、大坂の両替商からこぞって献金させれば1、2年分の支出をまかなうに十分でしょう、という返答であった。これに対して、吉宗はそんなことをすれば、金融は滞り、混乱は計り知れない。そんな一時しのぎの策を考えているのではない、と言って戒めた。二つの事例を比較すると、吉宗は定信よりはるかに大きな視野でモノを見ていたといえる。

また、林子平が『海国兵談』（1788）を刊行し

て外国勢力とくに北方ロシアの脅威にたいして警鐘を鳴らし、海岸防備の必要性を説いたのに対して、定信は出版を差止め塾居を命じたのみならず、版木を没収してしまった。一介の町人が幕府の政治に口を挟むなどということは許されないというのがその理由であった。しかし、その4ヶ月後にロシアの使節ラクスマンが来航して通商を要求した際には、定信は江戸湾の防備の手薄なことに気がついて深刻な脅威を覚えた。しかし、定信にとっては子平を起用するようなことは論外で、自身、江戸湾の海防のため奔走したのである。実質的な成果より、あくまでも幕府の権威を守ろうとする姿勢がここにもよく出ている。

江戸時代ではもっとも深刻な朝廷との確執だったといわれている尊号問題においても同様の姿勢が貫かれた。この事件は光格天皇が父に上皇の尊号を贈りたいと幕府に了解を求めたことに端を発した。定信は幕府にとって何の害もない単なる尊号の授与に対し強硬に拒否の姿勢を貫ぬき、朝廷の上に君臨している幕府権力の力を見せつけようとした。このころ、幕府権力の正当性についていろいろと議論が起こっていた。すなわち幕府の権力は天皇から授与されたものであるから、幕府の上に天皇があるという主張が次第に流布していた。こんな時に起こった尊号問題は定信にとって譲れない一線だった。最後にはこの要求を仕組んだ公家を罰して、幕府の方が上位にあることを鮮明に印象づけたのである。

鎖国の再定義

こうした幕府権力の再確認は、外交関係においてもはっきりと示された。このころロシアからの通商を要求する船がたびたび来航した。10年間も漂流生活を続けた大黒屋光太夫を乗せて来航したラクスマンも(1792)、通商要求が主な目的であった。これに対し定信は鎖国が我が国の祖法であり、変えることはできないとして拒否した。実は開府以来鎖国を決めたことはなく、ポルトガル船の入港禁止など、その場しのぎの政策のつぎはぎが全体として鎖国体制を形成していたにすぎないのであるが、想定外のロシア

船の来航に対して、定信がこのとき初めて鎖国が祖法であると再定義したのである。

定信にとってはこのように幕府の権威の再構築が最重要課題だった。吉宗は実質的な再建を目指したのに対し、定信は権威の確立、権威の再定義を進めたのである。

このような定信の姿勢をよく示している事例がある。定信が老中になって江戸へ上るために白河を後にするとき、自分の肖像画を書き残した。若々しい貴公子が端座した姿が描かれている。白河藩では年始をはじめとして主な祭儀のたびに藩士たちにこの画像を参拝させていたといわれている。自己の権威の確立、神格化をすすめた定信の一面がよく現れた事例である。

これに対し、吉宗は自分の権威という面ではきわめて無頓着であった。ある時狩りに出て大雨にあった。ずぶぬれになって休憩所の禅寺に入って裸になったまま上げ畳に座り、その姿のまま、ということは禪のままであろう、その姿で少しも気取ることなく禅僧たちと談笑していたという。将軍としては異例の行動であった。

形式こそ大切と考えた定信と、中身さえよければ形式はどうでもよかった吉宗の態度は、好対照をなしていた。

吉宗の政策が、家康の時代への回帰を目指したのに対し、定信はより進行した幕藩体制の危機に対応して、幕府権力の再構築、権威の再確認を進めたのである。

改革とはなにか

一般に、吉宗の諸政策を「享保の改革」、定信の諸政策を「寛政の改革」とよぶことが多い。そして、後の水野忠邦の政策を「天保の改革」と称して、江戸の三大改革と呼ぶことが一般的である。

しかし、このように呼んでしまうと、あたかも同質の政策が繰り返し行われたかのような印象があり、歴史がきわめて平板に見えてしまい、その実相が見えにくくなってしまいう危険性がある。これらの時代が同じだった訳はなく、まして改革の名で、共通する政策が行われたか、はなはだ疑問である。

「改革」とは本来、常識が行き詰まったとき、

古い常識を「一新」するか、あるいは「修正」するような行動を指すものである（このうち「一新」を“革命”と「修正」を“改革”と区別する用語法もある）。ところが、上述の三大「改革」を含め、江戸時代の改革と言われる政策は、しばしば古い常識への回帰、あるいは常識の再確認というケースが多く、組織の改革の名にふさわしいか、はなはだ疑問と言わざるをえないのである。

そもそも徳川家康を神君としてあがめる徳川の血統をひく將軍と譜代大名たちが支配する徳川幕藩体制は、基本的には家康の立てた大方針に忠実に、したがって保守的にならざるを得なかったのであり、彼ら自身の手で常識を「一新」することはおろか「修正」することすら非常に困難だったのである。従って、江戸時代には改革の名にふさわしい政策は基本的に困難だったのである。事実、俗に言われる「江戸の三大改革」はいずれも傾きつつある現体制の延命を策するもので、決して新体制への転換を図るものではなかった。

実情に即して見てゆくなら、吉宗が行った諸政策は、財政再建、新田開発、米価政策、法整備、蘭書輸入解禁、人材活用、消防等々ときわめて広範囲にわたっており、その政策は、吉宗以後も継続して行われたものが多い。田沼意次はそのうち、例えば、印旛沼の干拓など積極的に継続推進したし、蘭学の発展を促進した。定信は米の安定供給のための諸政策に力を注いだ。吉宗の諸政策がその後も有効だったものが少なくない。こうした面から見ると、江戸時代を組織に見立てた時、吉宗は改革者というより、江戸時代の中興の祖というべき人物であるといえるかもしれない。

定信と常識

では、このような定信の政策は、江戸時代の4つの常識から検討すると、どのような意味をもっているのだろうか。

まず、鎖国の常識についてみると、上述のようにロシアからの開国要求を拒否し、鎖国を祖法として再定義するという典型的な常識への差戻しというべき行動をとっている。

次に米に対してはどうだろうか。定信の政策の中で、全国に備蓄米の倉庫を築き、飢饉に備えるという政策は非常に熱心に追求され、一定の成果をあげた。このころ天明の飢饉をはじめ大規模な天災が続発し、多くの犠牲者を出していた。定信はこの状況に深刻な危機感を抱き、このままでは国家の存続すら危ういとして、全国に備蓄倉庫の建設を進めた。これも定信が米をはじめとする穀物を重視した要因であるが、米の安定供給のため百姓に質素儉約を求め、米を中心に穀物の作付けを強く求めた。農村にまで浸透した貨幣経済を押しとどめ、米中心の生産を強く推進したのである。商品主体から米主体の経済へと大きく舵を切った、つまり、米本位経済の常識へ差し戻したのであった。

では、参勤交代に関してはどうであっただろうか。じつは、定信は吉宗の行った上げ米の制を行おうとして検討したのであるが、実行には移さなかった。その理由は、すでに全国の藩士にとって参勤交代で江戸に滞在することは彼らの生活にとって重要なことになっており、決してその短縮は望まれていないことが分かったからであった。つまり参勤交代の常識は、社会の構造として定着し変更しがたい強固なものになっており、手をつけることができなかったのである。

最後に、世襲と身分制度の常識について見てみよう。定信は前述のように本来將軍になってもおかしくはない立場にいながら、排除された人物であり、そのトラウマは、強く染みついており、政策決定の根底に常に流れていた。定信は常に家康の血を引く自らの血統の良さを意識しており、政策集団としても譜代、御三家を引き込み、幕府の中枢を固めたことによく現れている。それが、幕府の権威をいやが上にも強調する行動につながっていた。世襲を原則とする徳川幕府の常識に最も忠実たろうとしたのが定信だったのである。身分制度については、商人が力を持ち、武士をないがしろにする態度に腹を立て、「棄捐令」を出して、借金を踏み倒すなど、商人の力を抑え、農民に対しても商品作物の生産を制限し、なによりも武士の権威を取り戻すために力を尽した。崩れかけてきた身分

制度を立て直そうと努力した、つまり、身分制度の常識への差し戻しにつとめた。

このように見てくると、定信は全ての常識に対して、強い差戻し行動をとっており、常識への回帰という現象が最も顕著に見てとれる人物だったといえよう。

3.4 本居宣長と国学の発展

徳川幕府は徳川一門が支配する体制の正当化のために、儒学を公認の学問として、その普及に努めた。まず家康は儒学を中心にすることを決め、林羅山をお抱えの学者とした。つぎに5代将軍綱吉は老中や諸大名を相手に自ら「大学」「四書」「易経」などの講義をすることを好み、このため各地に好学の気風を植え付け、全国に藩校設立の機運が起こった。さらに松平定信は学問を奨励し、特に林家を優遇し、昌平坂に学校を作らせ、幕府公認の学問所とした。これから、儒学なかでも朱子学が幕府公認の学問としてみとめられ、各藩もこれにならって儒学とくに朱子学を中心に据えた藩校を整備していた。

ところが、江戸も衰退局面に入ると、こうした動向に逆らうかのように、日本の各地で独自の学問が生れ、成長し、驚くべき進化をとげてゆく。なかでも注目すべきものが国学といわれる一派である。

幕府の奨励した儒学は、なんといっても中国伝来の学問であり、原典は中国古代の孔子や孟子をはじめとする聖賢の著作であり、そのなかで取り上げられる事例はすべて古代中国の歴史に基づいたものである。そこにはわが国の歴史、文化はまったく入り込む余地はなく視野の外に置かれていた。その理論は幕府の支配を正当化するには便利だが、日本には武士の政権の前に千年の歴史がある。これをどう理解するかが説明できない。

これに対して国学は、中国の哲学に触発されたとはいえ、わが国の文学・歴史を見つめ直すところから出発した。日本には、「万葉集」という歌集があるほか、「古事記・日本書紀」という歴史書があり、さらに「源氏物語」という世界最古の文学作品がある。こうした日本人の文

化的遺産がありながら、中国の古典を輸入して学問としているのだから、どうしても不自然である。さらにこの時代オランダを通して西洋世界の存在が明らかになってくると、いよいよ中華絶対の世界観に対して疑いが拡がってきた。

国学の誕生

そこで、日本の古典を研究して、日本人の思想、感情の本質を極めようという機運が生れても不思議ではない。この学問を切り開いたのは契沖(けいちゅう)(1640-1701)である。契沖は日本の古典文芸の研究にあたって実証的な研究方法の基礎を築いたといわれている。それをついだのは荷田春満(かだのあずままる)(1669-1736)である。彼は神道と歌学を基礎として国粹的な要素を加えた自らの論を、積極的に世に広めようとした。賀茂真淵(かものまぶち)(1697-1769)は万葉集の研究を通して、古代の日本人の精神性を究めようとした。到達した結論は作為を排した無為自然の世界、「天地のままなる心」であった。次に現われたのが本居宣長(もとおりのりなが)(1730-1801)であった。

本居宣長は伊勢、松阪の木綿問屋に生れた。江戸に店をもつような大きな商家であった。武士でも神官でもなく商人だった。契沖は真言宗の僧侶であり、春満と真淵は神職の子であったから、宣長の商人という出自は当時としては、最も自由な立場を保証されていたといえるかもしれない。母親は宣長の資質を考えて、商家を継ぐにはふさわしくないと判断し、医師にするため京都へと送りだした。宣長はここで契沖、真淵らの書物にふれ、次第に学問に打ち込んでいった。もっとも生涯、医師としての職責をまっとうしながら、そのかたわら、研究を続け、子弟に教えつづけた。

「松阪の一夜」と「もののあわれ」

宣長が契沖、真淵に傾倒して学ぼうと、34歳のとき(1763年)、たまたま行きつけの古本屋へ行くと「残念でした。あなたが常々会いたいと言っておられた先生がつい先ほどお見えになりました」という。賀茂真淵が伊勢、山城などの

調査のついでにこの松阪へも立寄ったのであった。この時はあとを追ったがついに会うことができなかった。ところがその数日後、帰路再度松阪へ立寄った真淵について会うことができ、宿で一夜語りあかした。「松阪の一夜」として有名な出あいである。ともにその優れた資質を見抜き、ここで生涯の子弟の関係を結んだ。このとき宣長は古事記に取り組む方法をたずねた。これに対して真淵は、自分も古事記をやりたいかった、しかし、そのためには万葉集によって古語を究めなくてはならない、自分はその研究ですでに力尽きたと述べた。宣長はこの師の意志を継いで、古事記の研究に邁進する。

古語の研究を通して古代日本人の精神を掴もうとする真淵の方法に、宣長は共感しながらも、その独断的な見方には心服することができず、契沖の実証的な方法を失わなかった。宣長は江戸に帰った真淵に、くりかえし手紙で教えを乞い、ときに火花の散る論争をくりひろげた。しかし、最後までその尊敬の念は変わらなかった。

二人のもっとも大きな違いは、真淵が「万葉集」を最高とし、その「ますらおぶり」を評価したのに対して、宣長は「新古今」、「源氏物語」など王朝文学を高く評価し、そこに示された女性的な感性に共感し、そこから「もののあわれ」こそ日本人の感性の基礎であるとしたことである。

本居宣長61歳の自画自賛像という肖像画の掛け軸がある。その賛に「しき嶋の やまごころを 人とはば 朝日ににほふ 山ざくら花」という有名な歌がある。宣長が晩年に到達した境地がよくうかがえる。

こうした日本人の本来の感覚を理解するためには、中国の学問に犯されたわが国の学問から「漢意（からごころ）」を取り去り、純粹に日本の古典と同一化しなければならないと主張した。

一見簡単そうに見える話だが、ところがこれが一筋縄ではいかない。なにしろ、日本にはもともと言葉はあったが、それを表記する文字がなかった。古事記、日本書紀をはじめとする記録は中国の漢字を借りなければ書けなかった。

このため、その漢字のすべてに中国の世界観がからんでくる。たとえば、古事記の冒頭に「天地初発之時」と書かれている。これを宣長は「あめつちのはじめのとき」と読む。このとき「あめつち」とは中国の世界観に根ざした天地をイメージしてはならない。この文字を借りて表そうとした古代人の言葉の意味をこそつかまなければならないとするのである。

つまり、古事記の前に日本語の口承の文芸が存在した。それを表記するために漢字を借りたにすぎない考えるのである。これに続く「於高天原成神名」という部分は宣長以前までは「たかまのはらになる神の名は」と読まれていたのを、宣長は「たかまのはらになりませる神の名は」と読む。これを書いた古代人の身になって彼らが伝えていたに違いない日本の古語をよみがえらせるのである。つまり漢字によって書かれた文のむこうにある古代日本人のこトバを透視しようとしたのである。

宣長はこのように、生涯をかけた大事業として「古事記」の研究をすすめ、『古事記伝』44巻が完成したのは1798(寛政10年)年、69歳の時、実に35年を費やして完成にこぎつけた。

しかも、それは単なる原稿の完成ではなく、印刷のための版下の完成を意味していた。宣長は長男春庭にこの版下を書き続けるという厳しい仕事をさせ、ついに失明させてしまった。そして、ついに自ら筆をとって完成にこぎつけたのである。

道の理論

この宣長の研究は決定的な重みをもって受け入れられ、これ以降、こんにちに至るまで古事記は宣長の解釈によって読まれることになっている。

問題はその哲学である。「もののあわれ」までは、分かりやすいのだが、宣長はここからさらに、道の探求へと歩みをすすめる。「もののあわれ」はあくまでも文芸論である。しかし、道は人間の全てを包含した歴史、哲学となる。そしてここから日本人の生きる道を導き出す。つまり神の道である。日本人の生きる道は、全て天照大神(あまてらすおおみかみ)をはじめ

とする神々によって決められており、天皇の天下をしるしめす道であるという神秘的な結論に達する。

この道の理論をさらに神秘的、狂信的に推し進めたのが平田篤胤(ひらたあつたね)(1776-1843)である。宣長の学問はあくまでも実証的な裏付けをともなった側面があり、さらに結論としては全てが神々によって決定されているとして、現状肯定のおだやかな結論に行きついたが、篤胤は理論を飛び越えて信仰となり、熱狂的な行動に結びつきやすい性格をもっていた。これが、幕末に尊王攘夷運動に結びついたのである。

そこで、次に国学と言われるこの学問が、徳川幕府の支配体制、その成長と衰退にどのような関係をもたらしたかを検討しよう。

徳川幕府の支配体制の構造上、未整理のまま残された部分があった。それが天皇の権力であった。幕府は天皇から征夷大將軍に任命された將軍が最高権力を握る組織であった。そうすると、理論上は、徳川幕府の上に天皇が存在することは否定しようがない。その天皇は古代から続く家柄であり、その古代の神秘的な儀式を継承し保存していた。その権威の根拠は古代の文化の中に深く根ざしているのである。

日本古代の文化を再評価しようとする、どうしても天皇の存在を抜きにして論ずることができない。天皇という古代を体現する人が現存する以上、日本の古代文化の発掘評価は天皇の再評価と結びつかざるを得ないという、きわめて厄介な問題に行き当たるのである。

国学は、こうして徳川幕府が本質的に持っていた二重構造のうち、隠された権力、天皇をライトアップする役割をはたすことになった。幕末の政争には天皇が反幕府勢力に利用されたが、このとき、国学は反体制イデオロギーとして利用された。国学により、幕府の権力は相対化され、倒幕勢力に力を貸したことは間違いない。

明治政府は欧化主義を中心として文明開化を推し進めたから、国学は後退した。国学が再び脚光を浴びるのは、昭和の戦前期である。反欧米、国粹主義が台頭するとともに国学はふたたび引き出され、本居宣長も復活した。熱狂的な

国粹主義の勢力にとって本居宣長は便利なイデオログだった。戦前の小学校の教科書には「松阪の一夜」の逸話が掲載され、大正12年から昭和20年まで20数年間、小学校6年生に教えられた。この当時の教育を受けた人にとっては宣長は常識として刷り込まれたのである。

戦後になっても小林秀雄が10年に及ぶ雑誌連載ののちまとめた『本居宣長』(1977)は大きな話題になり、宣長が過去の思想ではないことを示した。

2005年、藤原正彦が書いた『国家の品格』は超ベストセラーとなり、日本中に大きなブームをまきおこした。グローバル化の大合唱のなかで、欧米中心の世界観、価値観より日本人の考え方、感性のほうが優れていると論じて、自信を喪失していた日本人のナショナリズムをかきたてた。日本人は自分のアイデンティティを失ってはならない。民主主義よりも武士道をとるもどせ、自信と誇りを持って書いた。その中で日本人の感性がいかに優れているかを論ずるにあたり「もののあわれ」を理解できる微妙な感性を持っているのは日本人だけであると繰り返し主張している。藤原は宣長を引き出さなかったものの、宣長の発掘したことばの力が現代にまでとどいていることを思い知らされる。

宣長は天皇を絶対的な存在として日本の支配構造の中に位置づけたが、同時に幕府の支配をも正当化した。しかし、その思想は江戸時代に収まることはなく、はるかに大きな射程距離で、今日までその影響力を示しているのである。

秋、それはものみな黄昏の季節である。組織もまたそのとき衰えゆく。

「組織の適応モデル」によれば、組織の秋は、組織の盛衰サイクルの第3の局面で、保守局面の前期である。このころになると組織のそれまでの成長を支え、それに費やされていた資源が不足しがちとなり、成長はストップし、衰退が始まる。成長ゆえの衰退である。そのため、組織の屋台骨は揺らぎ始める。ところが、大多数の人たちは、最前まで繁栄をもたらしてきた常識を疑おうとはせず、常識は依然として、組織としてのまとまりをもたらすバックボーンとな

っている。

こうした状態に違和感や危機感を感じず少数の人は、組織の見直しや建て直しを図るべく様々な思想や施策を試みるのである。

そこで、江戸時代の秋である。組織の適応モデルによれば、組織の秋は長期低落傾向を特徴としている。したがって、われわれは江戸時代の秋を徳川幕藩体制が次第にほころびをあらわにしていく時代として捉えた。そして、そうした時代と積極的にかかわった人物、すなわちほころびをあれこれ取り繕おうとした人物と、ほころびをもたらしているそもそもの国のあり方を根本から見直そうとした人物とをとり上げ検討してみた。前者は八代将軍徳川吉宗、と二人の老中田沼意次と松平定信の三人で、後者は本居宣長である。

まず、前記三人の為政者に関して言えば、彼らの常識に対するスタンスがそれぞれかなり異なっていて、それを反映してか社会の様相も大きく違うことがわかった。それぞれを少々類型化していえば、吉宗は修正主義者の部分と原理主義者の部分とを大きなスケールであわせ持つ人物で、田沼は大胆な修正主義者としてふるまい、定信はひたすら原理主義路線を推し進めた、とでもなろう。

ところで、俗に江戸の三大改革として、吉宗の「享保の改革」、定信の「寛政の改革」が言われている。しかし、改革を「目新しい変化をとまなうもの」とすれば、この俗説は(後の水野忠邦の「天保の改革」を含め)かなり疑問で、むしろ田沼政権が改革の名に値するのではないか。

また、本居宣長は、何事につけ中国を長い間モデルとしてきたことに疑問を投げかけた。そして、彼はわが国固有の物事についての感じ方があるはずであると、それをわが国の古典文学に探った。こうした彼の思考と思想は、やがて徳川幕藩体制を倒すイデオロギーとなっていたばかりでなく、今もなお少なからぬ影響力を有しているのである。

しかし、全体を通していえば、徳川吉宗が八代将軍となった1716年頃からの長期低落傾向は、数々の天変地異も加わって、松平定信が失脚し

た1801年に至るまで、止まらなかった。したがって、江戸時代の秋は1716年から1801年までといてよいだろう。

そして、江戸時代は、幕府の崩壊過程をバックに常識を根本的に疑う新興勢力とあくまでも常識を守らんとする旧勢力とが、徳川幕藩体制の存亡をかけて闘う動乱の冬の時代に入っていくのである。

ちなみに、前稿で、江戸時代の春将軍は徳川家康、夏将軍は五代将軍綱吉としたが、それにならってというならば、秋将軍は八代将軍吉宗とでもなろう。

【参考文献】

- 大石慎三郎 (1969)『徳川吉宗と江戸の改革』 講談社
 大石慎三郎 (1991)『田沼意次の時代』 岩波書店
 小林秀雄 (1992)『本居宣長』(上・下) 新潮社
 子安宣邦 (1992)『本居宣長』 岩波新書
 子安宣邦 (2005)『本居宣長とは誰か』 平凡社新書
 田原嗣郎 (1967)『本居宣長』 講談社現代新書
 辻善之助 (1980)『田沼時代』 岩波文庫
 辻 達也 (1958)『徳川吉宗』 吉川弘文館
 芳賀 登 (1972)『本居宣長』 清水書院
 藤田 覚 (1993)『松平定信』 中公新書
 藤田 覚 (2007)『田沼意次』 ミネルヴァ書房
 源 了圓 (1973)『徳川思想小史』 中公新書
 藤原雅彦 (2005)『国家の品格』 新潮新書
 吉村 昭 (1974)『冬の鷹』 毎日新聞
 吉村 昭 (1995)『彦九郎山河』 文芸春秋社